

## 森林公園における利用者の行動と空間の印象評価に関する研究

森林浴が注目されて以来、森林公園の役割があらためて注目され、日本中で森林内に散策路が整備されている。そこで本論文は良好な散策路を計画するため、森林散策の実態を把握するとともに、利用者が散策中に行った具体的な行動や、散策路中の空間に対する印象評価を明らかにしようとした研究である。研究の視点だが、従来の森林散策空間を場所ごとに評価するという点的視点に対し、実際の散策行動を考慮した連続的な視点から利用者の評価行動と印象評価を明らかにすることであり、それが本研究の特色である。対象地を全国初の自然休養林である赤沢自然休養林とし、森林散策を行う利用者にアンケート調査と同行調査を行った。

本論文の構成と内容は、以下の通りである。

第1章では、既往研究の着目点と成果を説明し、本研究の目的と意義、既往研究に対する位置付け、及び論文の構成を説明している。

第2章では、調査対象地、調査方法を説明している。

第3章では、代表的な森林公園である赤沢自然休養林の利用者の主な移動経路とその特徴を把握した。赤沢自然休養林には散策路が8コース整備されているが、森林散策を目的に来訪した利用者を、1つのコースのみ利用するⅠ型、2つのコースを歩き公園内を小さく回るⅡ型、3つのコース以上を利用し公園内を広く歩くⅢ型と分類すると、Ⅰ型とⅢ型の利用が多いことが明らかになった。

第4章では、散策コースにおいて利用者が評価した対象物、評価行動が生じた場所、その場所の特徴を調査し、検討した。その結果、長い経路を歩く場合、評価する回数が減少していくのが通常と考えられてきたが、評価回数が減少しない場合がある。しかも最後に歩いたコースの評価回数と全体の評価行動の回数との間に正の相関があることが明らかにされ、散策体験全体の質にも影響することが考察された。さらにグループ中の男性人数と評価行動全体の回数、また最後に歩いたコースでの評価行動の回数との間に負の相関があることから、グループ中の男性が多いほど評価行動が減少することが推定された。つまり、利用者の評価行動はその空間の植生などの環境的要因や景観的要因に影響されるのみではなく、グループの構成にも影響されることが明らかになった。

第5章では、林内空間である走り根エリアと冷沢峠、水要素を有する空間である平沢橋と呑曇淵の4カ所において、利用者のその地点までの散策距離の違いに着目し、利用者が受ける印象評価の傾向、及びそれらの場所に対する評価の共通点と差異点を調査し、検討した。その結果、散策コース上の空間に対し、利用者がそこま

での散策距離が異なることにより、印象評価が変化することがあるという結果が得られた。さらに、林内の空間において空間の開放感、整然性、自然性に対する評価は、散策コースが異なっても共通していた。また、針葉樹林の空間の印象評価は散策の後半には低下するのに対し、混成林分の空間に対する評価は逆に上がる可能性があることが明らかにされた。森林景観の多様性が要因と考察される。一方、水がある場所では、共通した評価が見られないことが明らかにされた。多様な空間構成や水流に触れるなど行為の多様性がその要因だが、その場までの散策体験の違いもその要因となっていることが考察された。

第6章では、以上の結果をまとめ、今後の散策路の計画に対して考察を行った。

本研究は、従来の森林散策空間を場所ごとに評価するという点的視点に対し、実際の散策行動を考慮した上での連続的な視点から、利用者の評価行動と印象評価を明らかにしている。今後、森林の散策コースを検討する上での新しい視点と新しい知見を有し、社会的意義も高い。よって本論文は、学位論文として十分にふさわしいと判断される。